

FINDER 2025

SOCIAL DESIGN × PHOTOGRAPHY

CONTENTS

青木 暁光	01
浅田 真優花	09
精松 智也	15
井上 貢一	29
越智 楓	39
佐藤 蒼	47
福井 涼	57
松本 龍太郎	67
山田 洸太	73

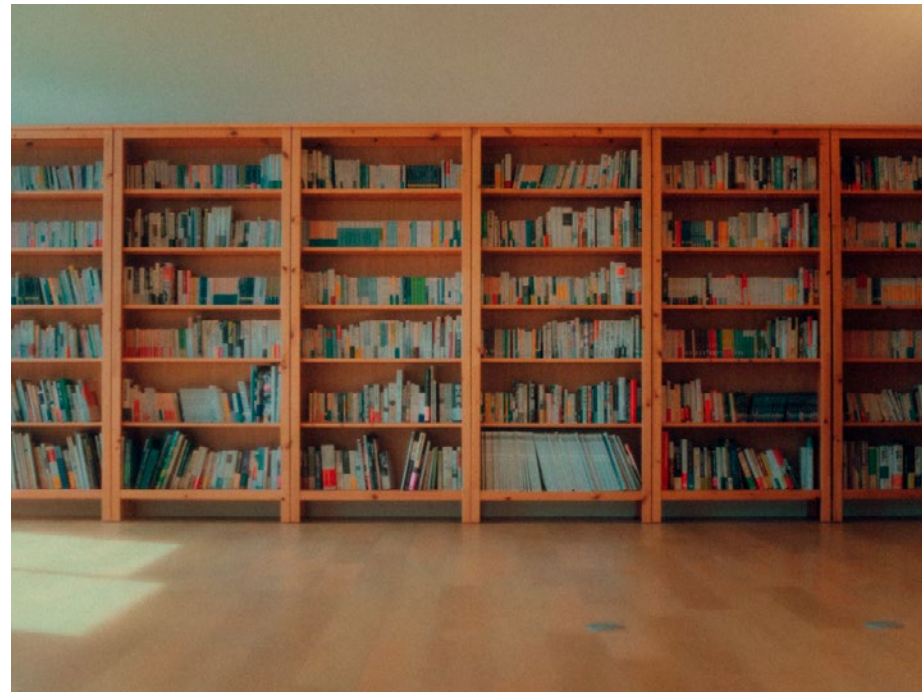
AKIMITSU AOKI



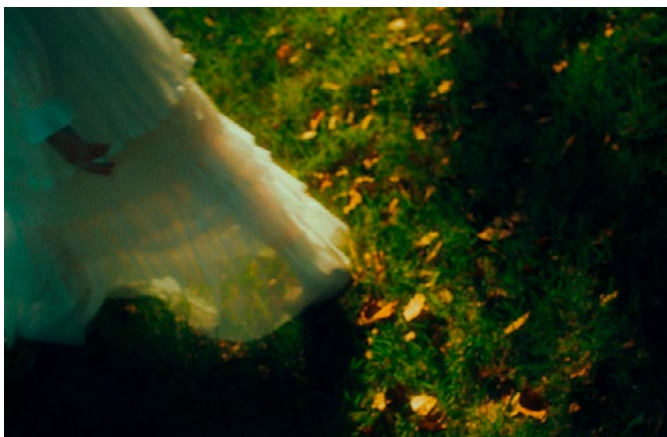
名前も知らずに
私は
立ち止まった



だから今も



名前を
探している



近づい

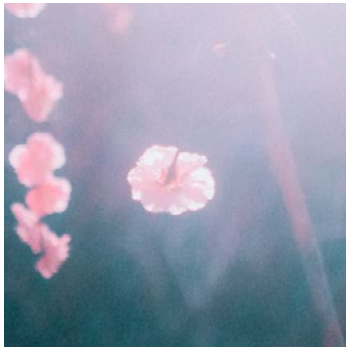
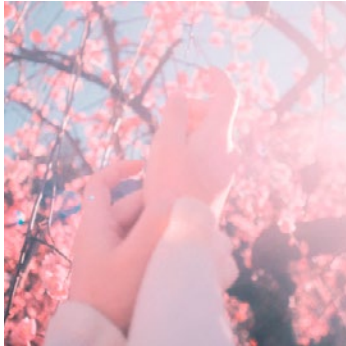
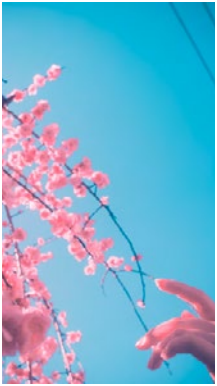
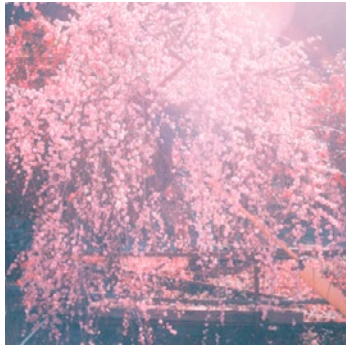
てしまうと

終わってしまふ気

がした



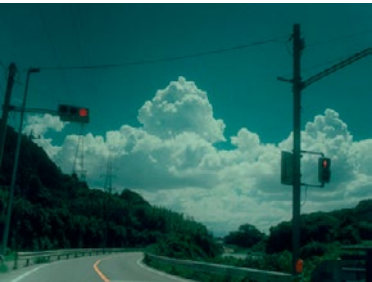
まだ、名前は知らない



f 5 b 1 9 9

聴色

縹色



2 7 9 2c 3



青木 暁光 Aoki Akimitsu

2002 年 生 ま れ

使用 カ メ ラ : S O N Y a7iv

Fujifilm X-E4

ト マ ト が 好 き



MAYUKA ASADA >





世界にたったひとつの、
愛おしい瞬間。



浅田 真優花 Asada Mayuka

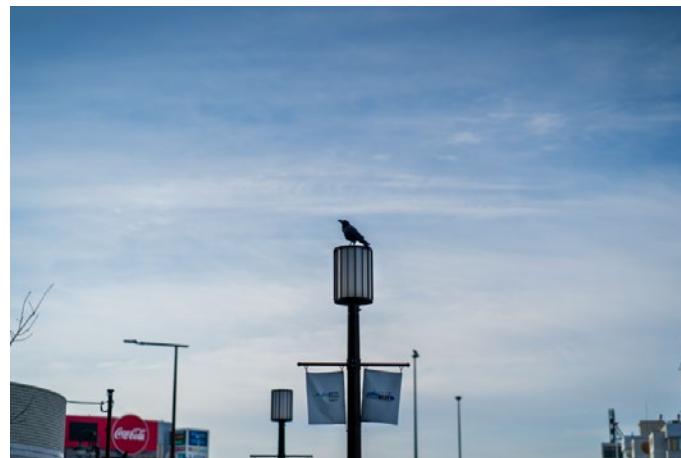
2004/7/19 生まれ。
NIKON Zfc を愛用中。
光がふわっと薫る写真が好きです:)

TOMOYA ABEMATSU

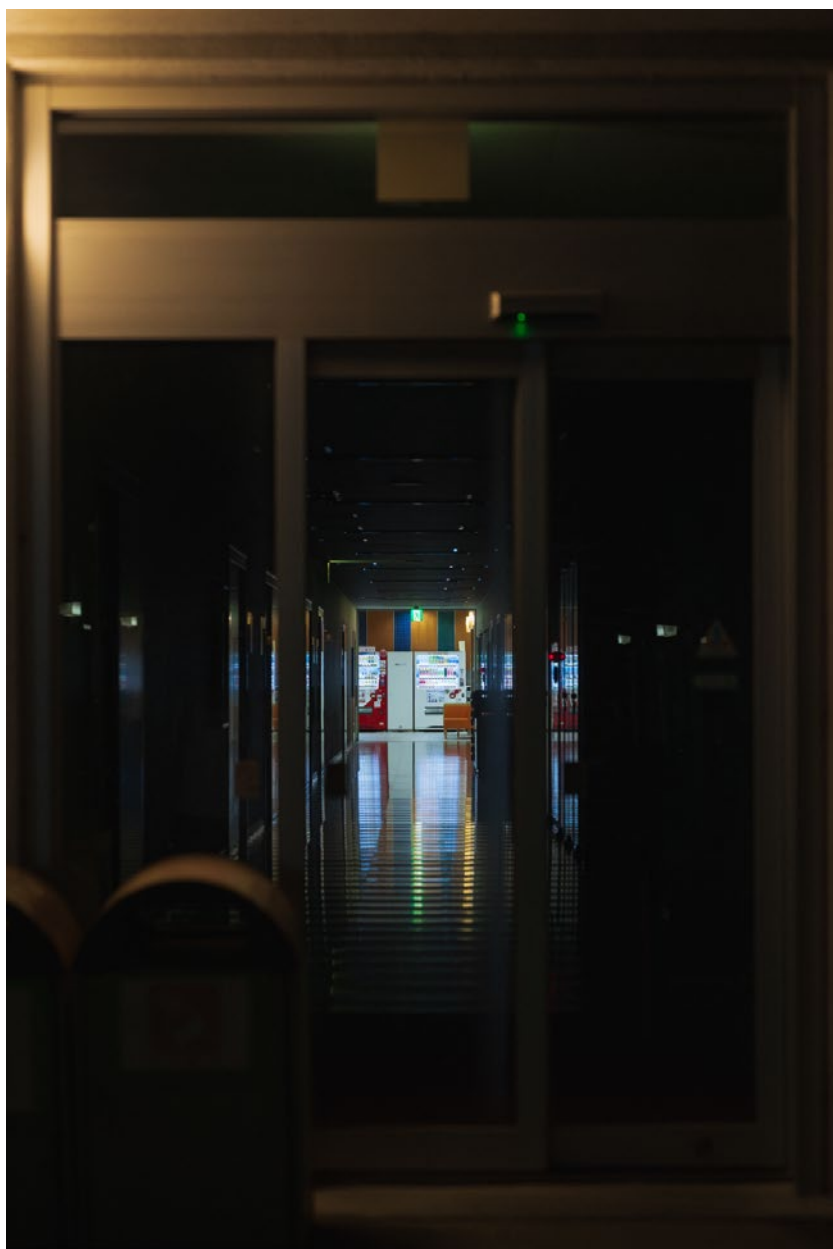


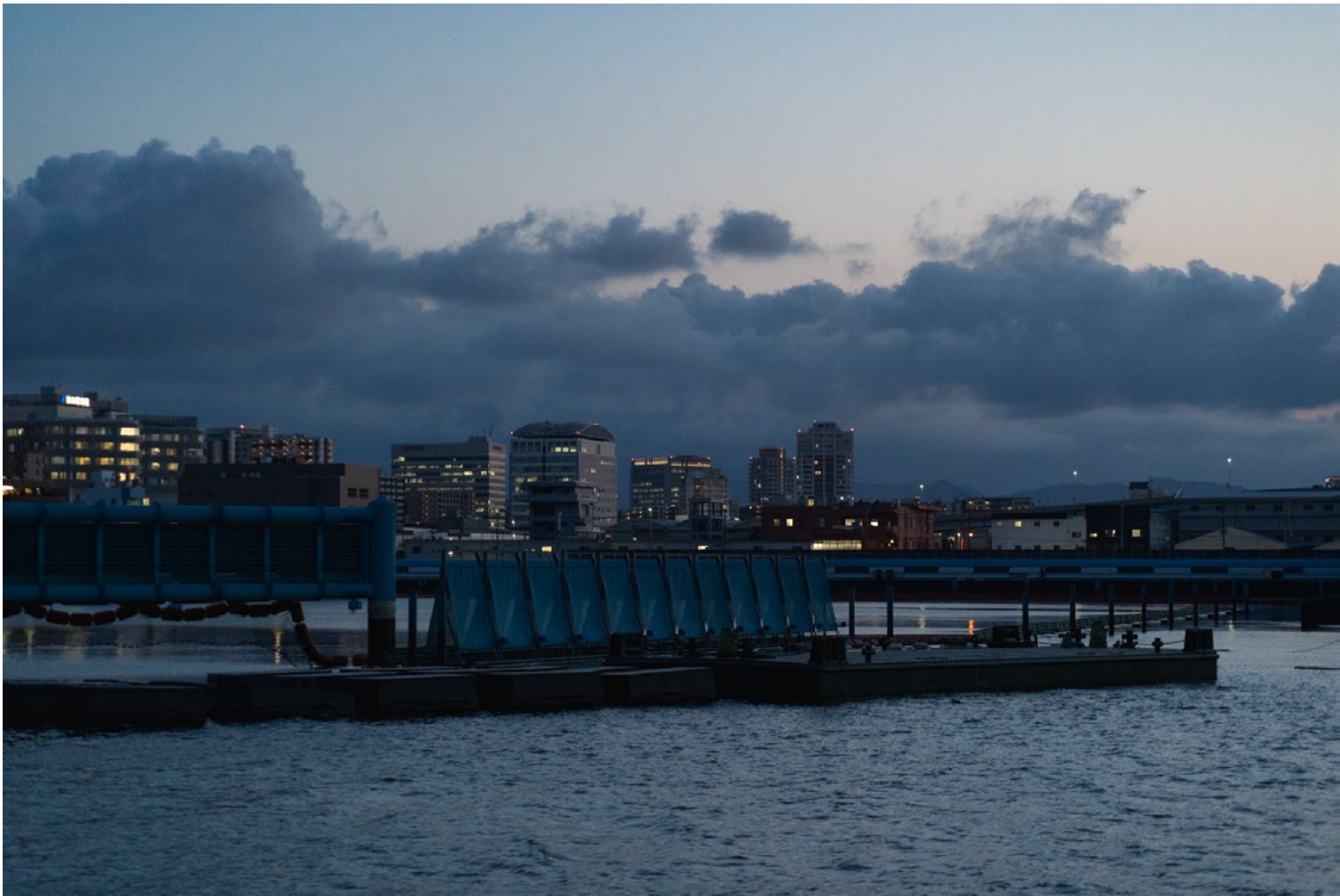














Camara
ASAHI PENTAX SP
SONY α7III

KOICHI INOUE





Marginal of Light and Shadow

CANON EF, FD 50mm F1.8

1/250, AUTO, ISO400



NO SIDE

CANON EF, FD 50mm F1.8
1/250, F8, ISO400



ON THE WAY BACK

CANON EF, FD 50mm F1.8
1/250, F5.6, ISO400



OLYMPUS PEN の記憶

小学3年の頃、近所の質屋の店先に「質流れ品」として置いてあった OLYMPUS PEN を ¥3,000 で手に入れた・・・というのが僕の写真に関わる最初の記憶である。なぜそれを欲しいと思ったのかは覚えていないが「ハーフサイズだから24枚撮りフィルムで48枚撮れるよ」と言われて、得した気分だった。

当時はカラーより白黒フィルムの方が安価で、さっそく店主に教わったとおりにフィルムを入れて近所の友達を撮りまくった。記憶は定かではないが「晴れの日にはシャッタースピード 1/100、絞り 16、距離を 5m に合わせるとあらゆる撮影が可能です」というようなことが説明書に書いてあった。意味はわからなかったが、外で遊ぶのが当たり前の時代だから、被写体はいつも日の光を受けて、何でもよく写った。今思えば「写ルンです」の設定に近い。

撮影済みのフィルムを近所の写真店に持っていくと、1日か2日で現像済みのフィルムとプリントを受け取ることができた。現像と焼き付け(プリント)は店の奥の暗室で行っていたようだ。昭和の時代はどここの町にも八百屋、酒屋、薬局などと軒を連ねてそんな小さな写真店があった。

プリントは「手札サイズ」といって名刺よりひと回り大きい程度のものであったので、多少の手ブレやピントのズレがあっても「ちゃんと写っている」ように見えた。プリントには白い縁があって、そこをつまむようにして眺める。当時の僕にとってそれは「世界のミニチュアを手に入れた」という感覚だった。スマホのように細部を拡大することはできない。だから想像力が必要だった。

店主は小学生相手にいろいろ教えてくれた。夏休みにセミをアップで撮った写真がピンボケだった時、「こんなアップは無理だよ。絞りは 16、距離目盛を最短の 0.6 に合わせて、正確に 60cm 離れて撮ってごらん」と言われて、絞りがピントの深さに関することや、距離が近いほど調整がシビアになることを知った。人間関係と同じだ。

僕が小学校5年の頃、「恐怖の心霊写真」という本が出版されて、バカな男子児童はこれに夢になった。「地縛霊」を撮るには PEN のようなカメラはうってつけである。似たような趣向をもつ友達と放課後走り回って、墓地の近くはもちろん、橋の下、建物の隙間・・・、この世の裂け目からの視線を感じる方へカメラを向けて撮りまくった。映える被写体のない方へカメラを向ける行為はポケモンを探すのと同じだ。通りかかる大人たちはいつも怪訝そうに「君たち何撮ってるの」と声をかけてきた。

クラスの中にはエクトプラズムという白い霊体を写すのが上手いやつがいた。要するに「光漏れ」だが、フィルム撮影にはそんな偶然が入り込む余地があるので、「お、これは！」と、みんながザワつくような写真がそれなりに撮れた。

というわけで、僕の視線は今も異界へと向かっていく。綺麗な写真が撮りたければ、究極のデジタル＝スマホを使えばよい。しかし、相手が「この世ならざるもの」であれば、偶然の余地を残すフィルムが必要だ。異界からのまなざしにカメラを向けていると、僕の背後から親子連れのつぶやきが聞こえてくる。「ねえママ、この人何撮ってるの？」

OLYMPUS PEN, ZUIKO 28mm F3.5



SATO-YAMA | YAME

OLYMPUS OM-1, ZUIKO 50mm F1.8
1/250, F11, ISO100

SEA SIDE | KARATSU

OLYMPUS OM-1, ZUIKO 75-150mm F4
1/500, F11, ISO400



My Favorite Cameras | 2025



CANON EF | 1973

シャッタースピード優先式 TTL・AE 一眼レフカメラ

F-1 の堅牢さと AE-1 の便利さを兼ね備えた縦走り金属膜フォーカルプレーンという変わり者。ハイブリッドシャッター仕様だが、1/1000 ～ 1/2 + Bulb が機械式であるため、電池なしでも使える。なぜか中古市場では人気がなく、この個体はヤフオクで ¥2,200。



OLYMPUS PEN | 1959

35mm ハーフサイズカメラ

28mm（フルサイズ換算 40mm）F3.5 のレンズと COPAL 社製のレンズシャッターの構成で、ファインダーは逆ガリレオ式というシンプル設計。当時 ¥6,000 だったが、新聞記者のサブカメラとしても活躍。この個体はハードオフで、なんと ¥110 。分解・清掃で復活。



OLYMPUS OM-1 | 1973

露出計内臓 35mm マニュアル一眼レフカメラ

発売当時、世界最小最軽量の 35mm 一眼レフとして登場。中段の PEN と同様、カメラ史に名を残すプロダクトデザイナー米谷美久氏の設計。この個体はヤフオクで ¥3,300。持病のプリズム腐食は OM-10 から移植。露出計は反応しないが、問題なく撮影できる。

KAEDE OCHI >



門司港レトロ 01
Pentax Spotmatic F



門司港レトロ 02
Pentax Spotmatic F



門司港レトロ 03
Pentax Spotmatic F



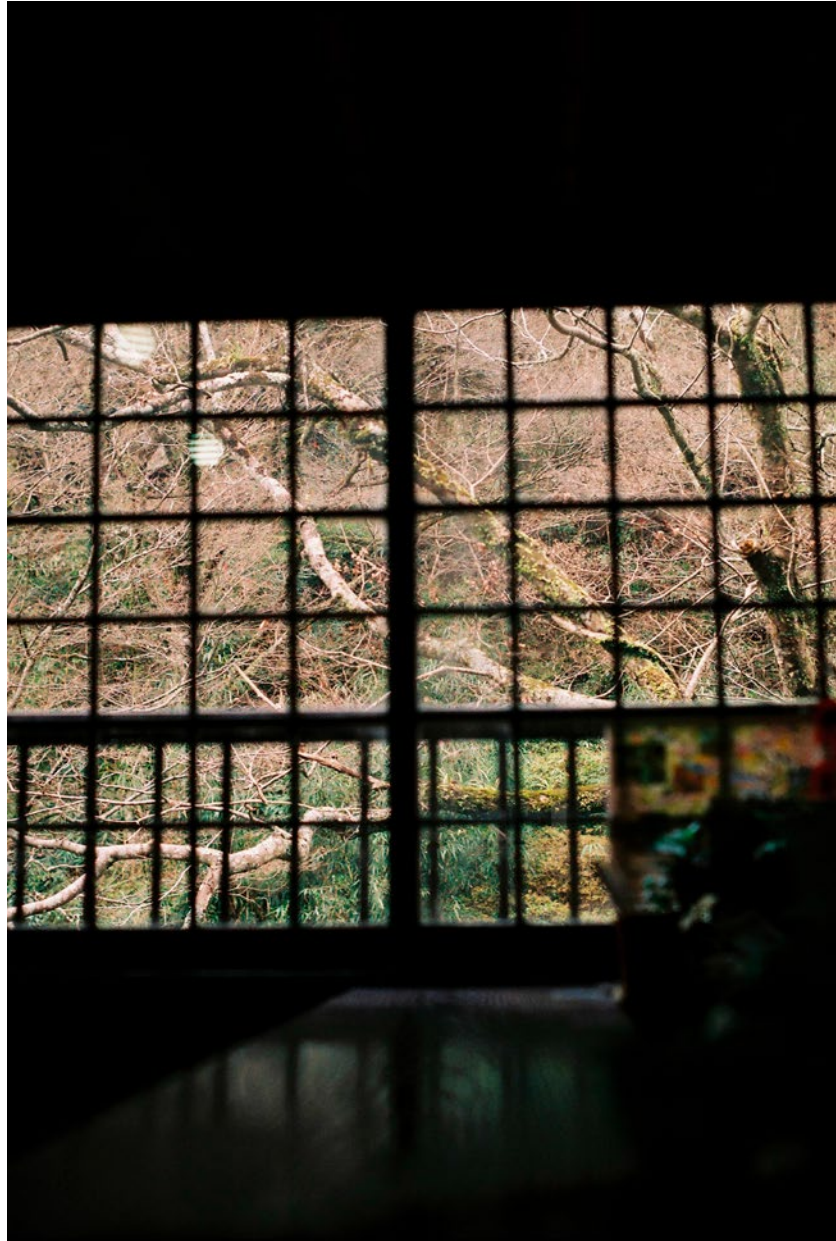
光

Pentax Spotmatic F



明かり

Pentax Spotmatic F



冬

Pentax Spotmatic F



山

Pentax Spotmatic F



越智 楓

趣味は舞台鑑賞、旅行。
大学4年生になり、フィルムカメラの良さに気づく。

今回掲載している写真は全て
下のフィルムカメラで撮影しました。

Pentax Spotmatic F



AOI SATO



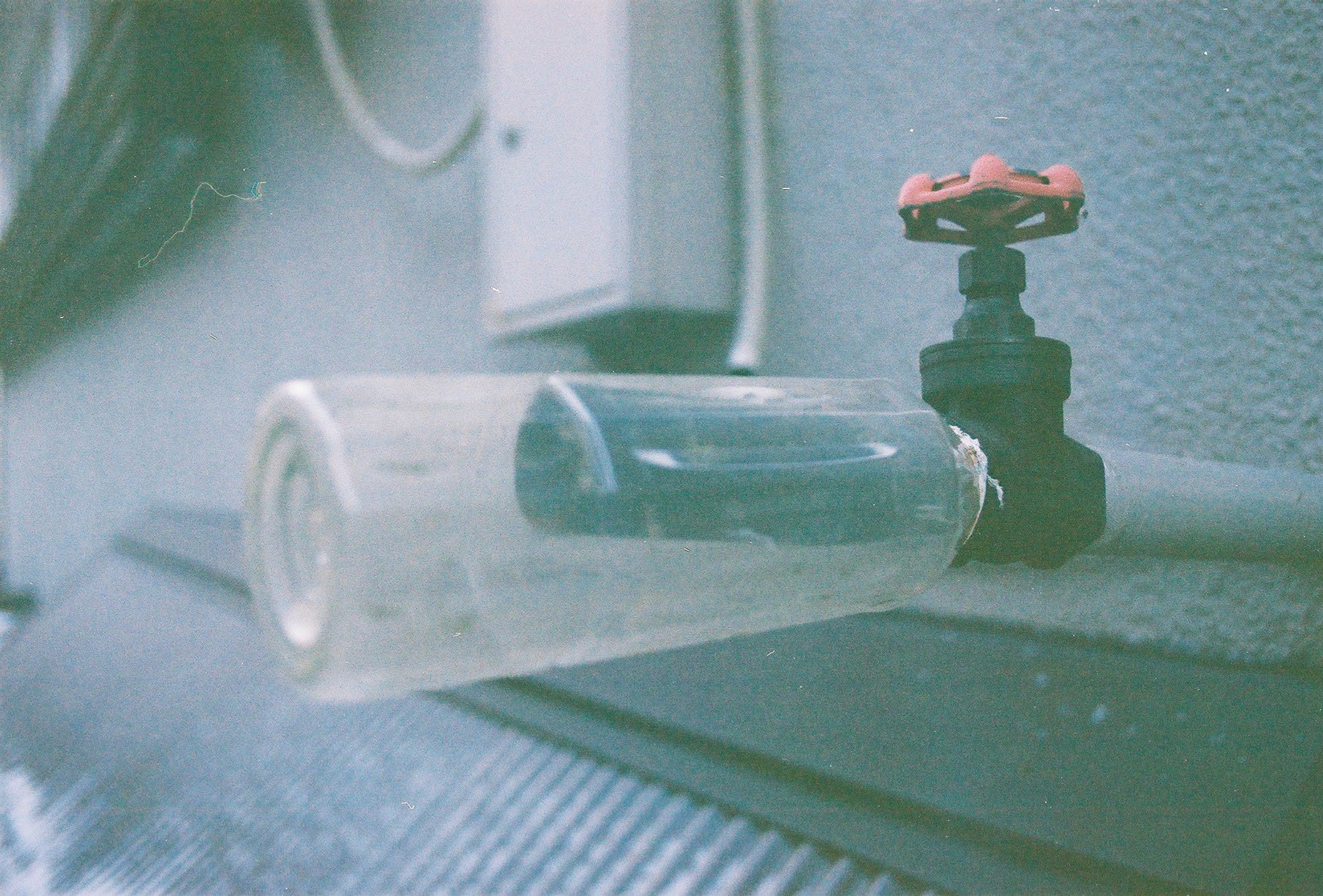


私は思い出が嫌いだ。

だから旅も嫌いだ。

いつか失ってしまうことに怯えるくらいなら
かけがいのない宝物などいない。

使い古したリュックに、覚悟と諦念だけを詰め込んで。

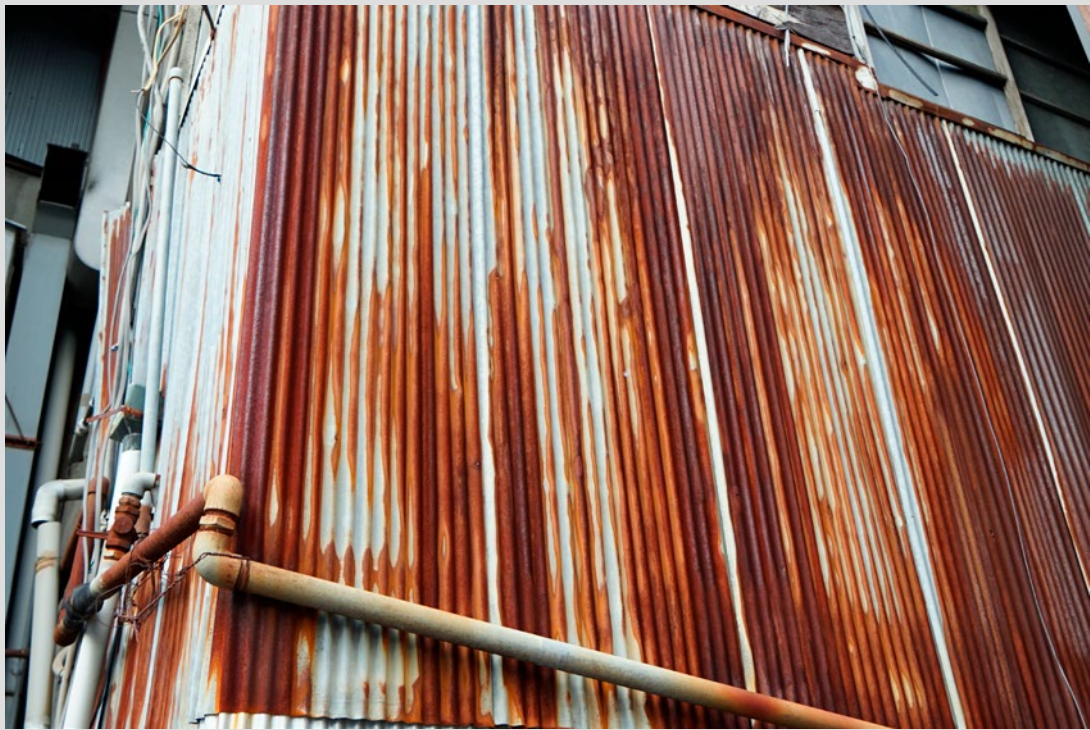


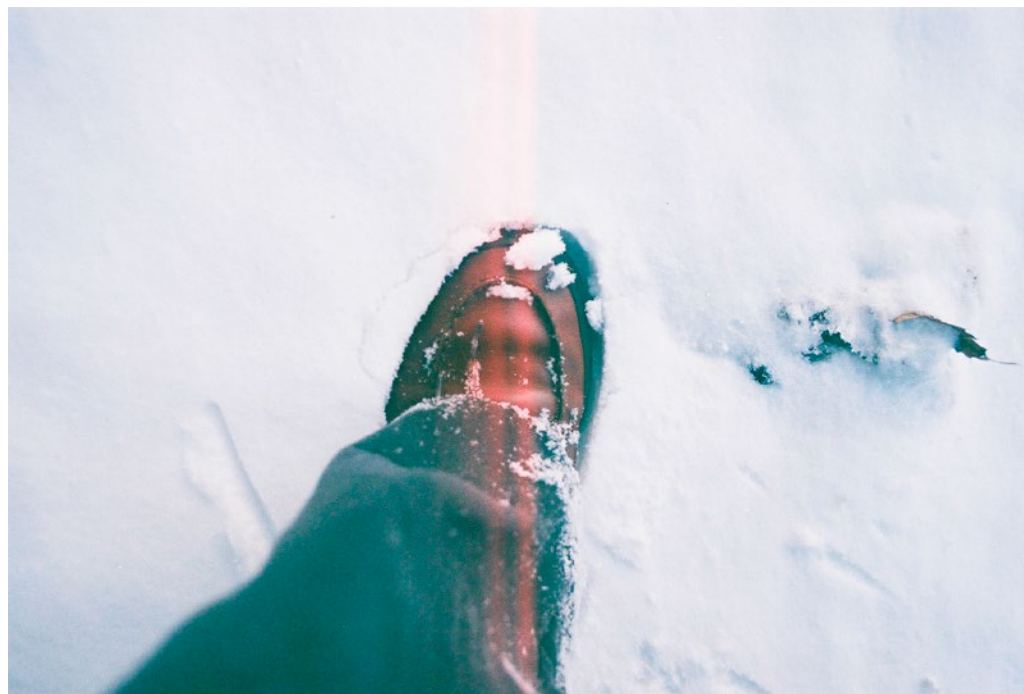
誰でもない私は、
どこでもないここで、
そっと息を潜めている。
あいつに見つからないように。

あいつは今、
室外機の間隙からそば耳を立てていて、
コンクリートの割れ目に巣食い、
錆垂れにすすり泣いている。

万が一、私が逃げおおせたなら、
その時は







SUZU FUKUI













福井 涼 Fukui Suzu

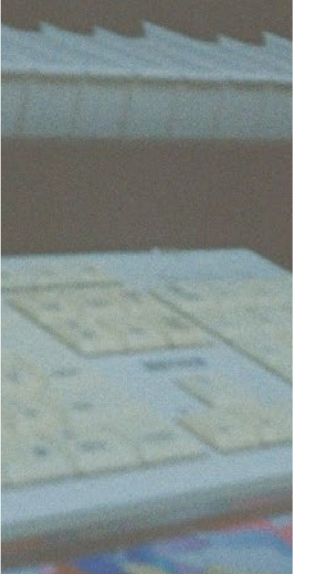
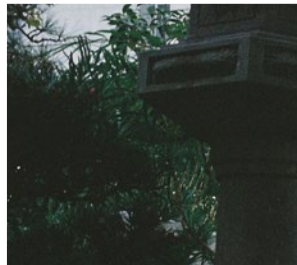
2004/9/28 生まれ。

載せている写真は、
去年オランダで過ごしたときの思い出です。

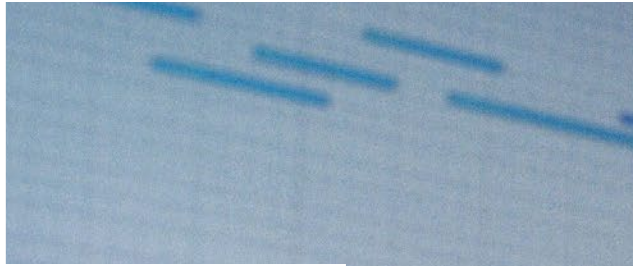
使用カメラ : SONY a7cii

RYUTARO MATSUMOTO

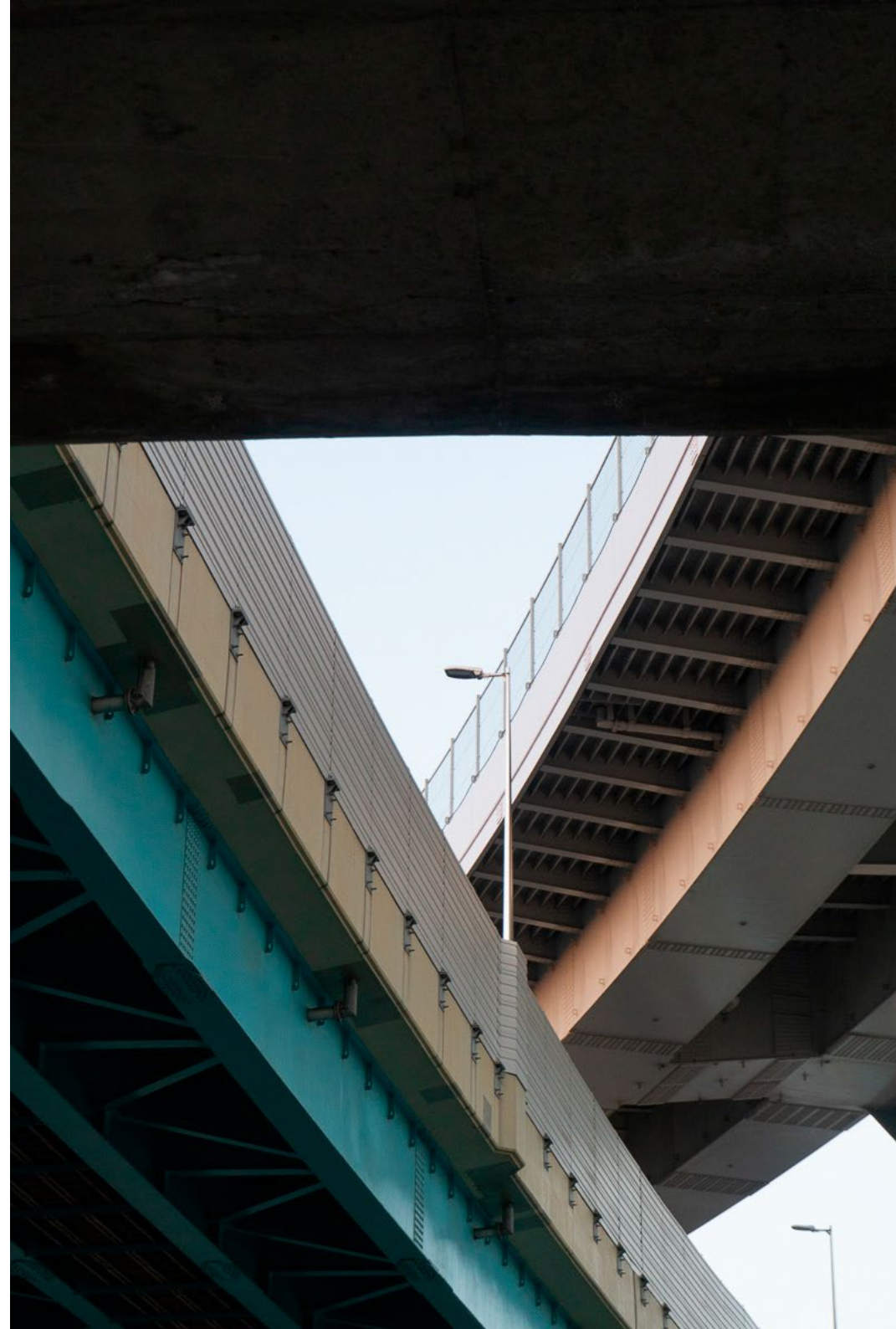






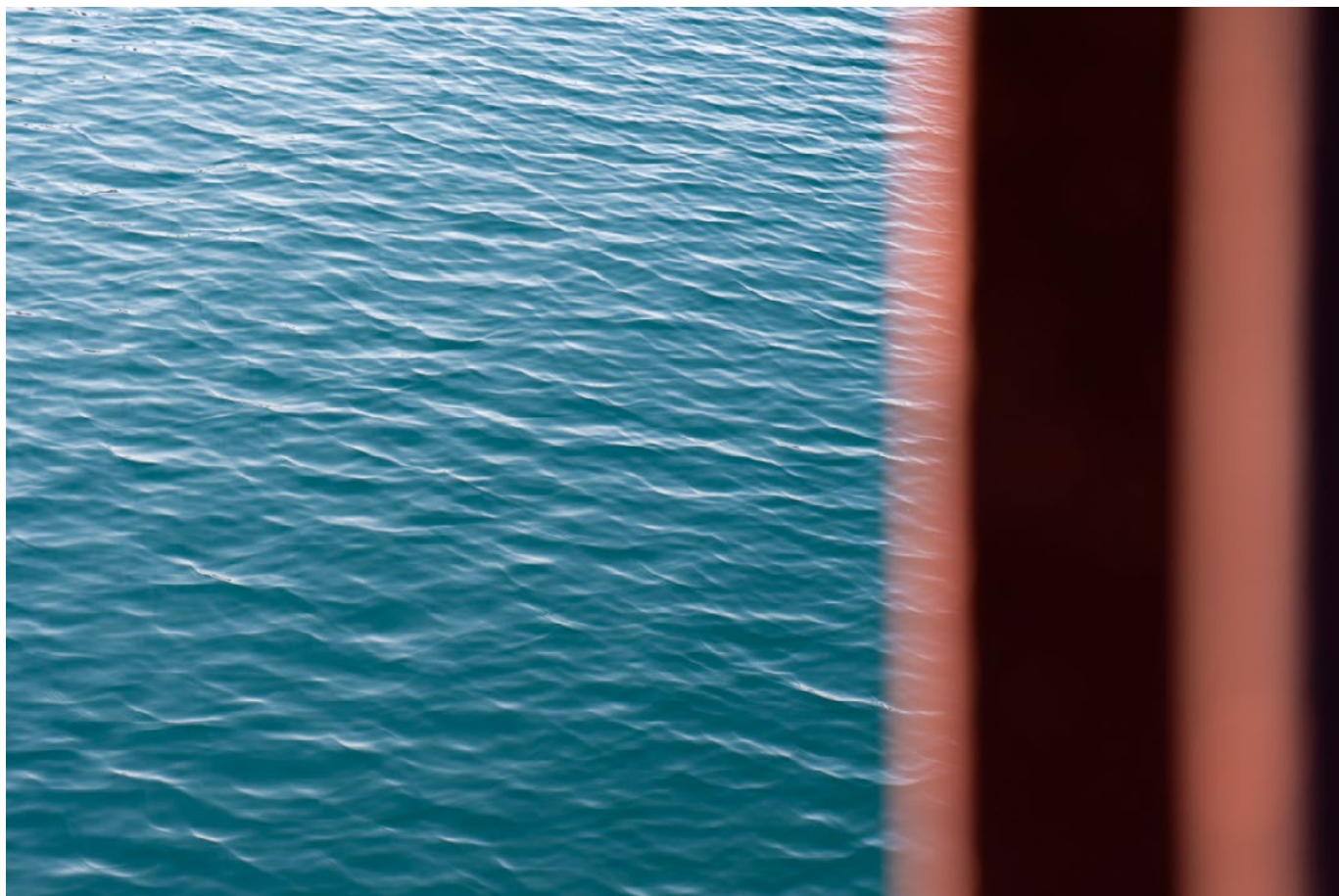


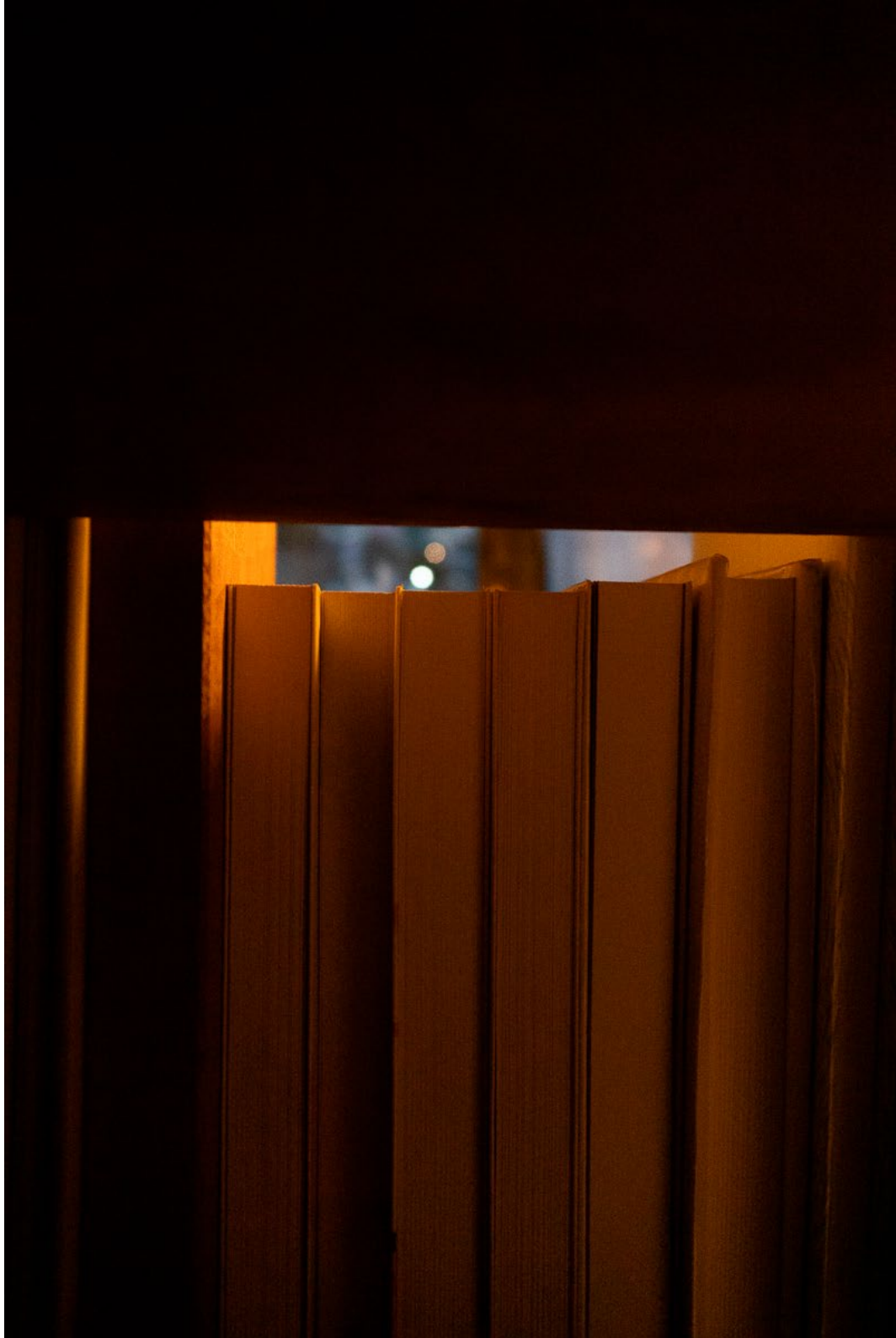
KOTA YAMADA >

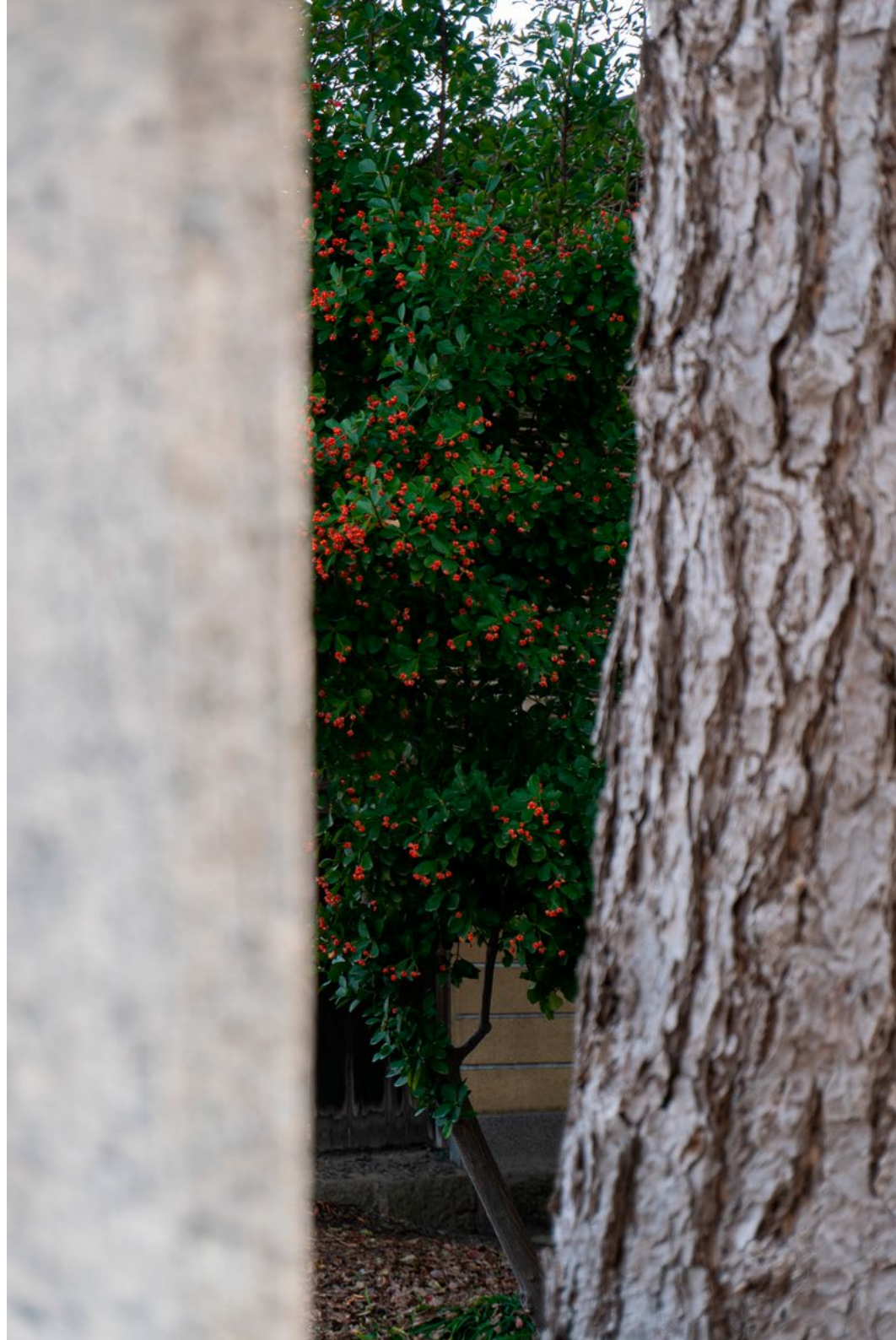












編集後記

2025 年度版の PhotoBook は、メンバーそれぞれの個性を反映すべく、それぞれのページをフリーフォーマットで構成してもらいました。印刷を想定して、扉のページを見開きイメージの右側に配置したことで、縦スクロールする PDF の閲覧環境では、違和感のある構成になってしまいましたが、それはまた次号の課題ということで・・・。

それぞれのページは、見開きで 1 点、ページごとに 1 点、また組み写真にするなど、写真の配置方法も様々ですが、これに言葉を加えて相乗効果を狙ったものもあります。被写体も撮り方も様々。メンバーそれぞれのまなざしを追体験できるものができたと感じます。

19 世紀の詩人マラルメ（Stéphane Mallarmé）は「世界は一冊の書物に至るために作られている」と言いました。物質的な現実世界に対する、精神的な「詩・芸術」の優位性を説いたものと言われていますが、その意味ではカメラの携帯が日常化した今、「世界は写真に撮られるべく存在している」ということもできるでしょう。現に、私たちが日常目にする風景は、写真に撮られることを前提に調整されていると言っても過言ではありません。

写真と深く関わるのが、世界について考える機会につながれば幸いです。

Koichi INOUE

FINDER 2025

Faculty of Art & Design

Kyushu Sangyo University

2026.03.17